

炎に向き合い、 自らの魂を知る

茂木 健一郎 *Written by Kenichiro Mogi*

たき火の形は、一瞬たりとも同じであること
はない。炎は踊り、姿を変え続ける。そのように
絶えず変化する火を見ている時に、心の中に喚
起される原始的感情の中には、有史以来の人
間の記憶が反映されている。

カナダの森の中で、一週間カヌーを漕いだこ
とがある。夜になると落ちていく枝を集めて、
たき火をした。熊が来るといので、食料はコン
テナに密閉した。さすがに熊が来るとまでは思
わなかったが、何やら動くものの気配がする度
に身構えながら、確かなぬくもりをもちたらし
てくれる炎を見つめ続けた。炎から夜の湖に目を
転じると、昼間はあれほど遠くに見えた対岸の

山が、手が届くほどすぐそこにあるような感じ
がした。たき火の明かりが、対岸を照らし出さ
ないことが不思議なほどだった。

大自然の中でたき火を囲む体験に、特権的
な意味があると言っているのではない。都会の真
ん中で、ふと灯すライターの炎にも、家の中でひ
ねるガスコンロの火にも、私たちの脳は特有の強
い印象を受ける。しかし、暗闇に囲まれて気配
をうかがいながら炎を見つめる時間の流れには、
やはり独特の感覚がある。炎を灯した瞬間、周
囲の暗闇が明らかに変質するのである。

屋外でたき火を見つめるといふ時間の流れ
は、文明を発達させた現代でこそ例外的なもの



イタリア、ポローニャの教会に灯されていたろうそく

だが、人類の長い歴史をふりかえれば、むしろそ
れが通例のことでもあった。人類共通の、思い
出せない記憶」の中に、暗闇の中で炎を見つめ
る体験は強く刻印されている。カナダの湖の畔
で、私の中からわき上がってきたものは、そのよ
うな、思い出せない記憶」だったに違いない。

「記憶」といって、私たちは自分が生まれ落
ちてから今までの人生の中で体験した具体的
なエピソードの記憶を思い浮かべる。しかし、こ
こで問題にしているのは、自分がこの世に生ま
れてくる以前の、脈々と続いてきた人類の体験
全体が、今この私の「脳」の中に残っている痕
跡のことである。

通常の意味での記憶、すなわち、「いつ」「どこ
で」「なにが」「どうした」といったイベントを構
成する要素がそろった記憶は、脳の神経細胞の
間のシナプス結合の様式として記録される。そ

れは、過去に出会った体験が、現在の脳の状態の中に残している「痕跡」のようなものである。

もし、過去に起こったことが、脳の現在の状態の中に「痕跡」を残していることを「記憶」と呼ぶならば、自分が生まれ落ちる前に祖先

が体験したことの影響が痕跡として残っている場合にも、それを「記憶」と呼んでいいだろう。その記憶は、具体的ないつ「どこで」「なにが」「どうした」というイベントとしては思い出すことができない。千年前、私の祖先が寒さの中、たき火を囲み、ほつと一息をついた、というように形でその時のことが思い出せるのではない。それでも、私の祖先たちが炎と折衝してきた長い時間の積み重ねの痕跡が、今、「ここ」に息づいている私の脳の中にあることだけは間違いない。その進化的なメカニズムの説明は、まだ緒についてはかりである。

太陽の輝き、抜けるような青空、どこまでも広がる海、土のにおい、春になってほろほろ花のつぼみ。私たちが世界との交渉の中で出会うものは、それが人類の歴史の中で祖先がくり返し対面してきた普遍的な対象であるほど、私たちの脳の中に強い反応を喚起する。そこには、個体として生まれ落ちて以来の体験だけではなく、



カナダの友人の山小屋に積まれた薪

長い進化の過程での集合的体験もまた反映されている。暗闇の中で炎を見つめる時、私たちの脳の中では、ある様々な、思い出せない記憶が喚起されるのである。

このような方法を使うといつても火が手に入る、と知ったばかりの人類にとって、炎は何よりも恐怖をもたらす対象だったに違いない。アポロが着陸してしまつた後の月と、昔の人がそこにウサギがいると思つて見上げていた月とは違つ。同様に、あれは空気中の酸素が反応しているのだと思つて現代人が見つめる炎と、太古の人が一体そこで何が起きているのかも判らずに見ていた炎とは違つ。もちろん、現代人が見つめる「炎」という表象の中にも、「酸化反応」という科学的説明には帰着できない不可思議なもの、気配が潜んでいる。しかし、一体何が起きているのか、科学的な説明さえもたなかつた太古の人にとっては、炎はまさに輪をかけてミステリアスで、魅力的な存在だったことは間違いない。

炎は、恐怖や不可思議さといった神話的喚起力が高いだけに、それを自分のものとしてコントロールできた時の喜びも深い。子供の頃、キャンプファイヤに行く、枝の先にマッシュマロを刺して、じゅわじゅわ焼いて食べるのが楽しみだった。

あまり近づけすぎると、黒いけになってしまう。マッシュマロがとろりと溶けたして、枝から落ちるか落ちないかくらいのもので加減するのが楽しかった。もちろん、焼いたからといってマッシュマロの味が魔法のように変わるわけでもない。マッシュマロ焼きの楽しみかなりの部分は、炎をそのようにして手なずけるといふ能動性の中にあつたように思われた。

たき火で、炎を手なずけるといふのは不思議な感覚である。粘土のように、直接触れて成形できるわけではない。薪を積み上げ、枯れ葉をのせ、新聞紙で焚き付け、時々薪の位置を変えたり、空気が通る道筋をつくったりする。そのような間接的な手段を用いて、炎を御しようとする。そこには、「複雑系の科学」などといった言葉がこの世界に出現するずっと以前から、きわめて複雑なダイナミクスがあり、豊かな力オスがあつた。

昼間のたき火には、夜のたき火ほどの求心力はない。カオティックに踊り乱れる炎の舌の様子がよく見えないからである。夜の炎には、いつまでも見ても飽きないほどの魅力がある。炎の舌が次にどのような形をとり、どのように引込むのか、予想することなどできない。燃やされる物質から立ち上る気体と空気が接する界面は時々刻々と変わり、私たちの意識を翻弄する。現代文明の中で私たちは「コンピュータのように論理で制御でき、予想できるものばかりで囲まれている。一方、炎の中には、人類が太古から慣れ親しんできたカオティックで予想が付かないダイナミクスの事例があるのだ。

炎のようにカオス的な動きをするものは、実は私たちの周りにあふれている。たばこの煙の動きを見ていれば判るように、部屋の空気の流れたって、予想ができない乱流に満ち溢れている。空の雲、風に舞う落ち葉、みそ汁の中の対流、そして何よりも、私たちの身体の中の様々な生理的なプロセス。自然は、もともと至る所で炎のように気紛れで躍動に満ちた振る舞いをしているのである。ただ、残念なことに、暗闇の中で乱舞する炎ほどには、これらの普遍的なカオスのダイナミクスを、はつきりと見ることはできない。だからこそ、暗闇の中の炎は、貴重な存在である。

私たちの脳は、論理に従って整然と作動するコンピュータよりは、炎の方に似ている。脳の中にある一十億の神経細胞は、何か具体的な指令が来る前から、自発的に活動している。たき火の炎がちらちらと動くように、脳の中に無数にある神経細胞は、それぞれが独自のリズムで活動をし続けている。そのような活動が、シナプスを通して複雑に結びつけられ、関連し合い、全体として暗闇の中の、炎のような有機的な秩序を作り上げる時、そこに「意識」という不思議なものが生まれる。意識の中に、様々なクオリア（質感）が感じられる。暗闇の中であかあかと輝く炎の表象も、また意識の中で感じられる不思議なクオリアの一つである。

古来、炎は生命の象徴であり、自然の営みの象徴であった。炎に見られるカオティックなダイナミクスが、自然界に普遍的に見られることを確認する時、私たちの祖先が炎の中に見出して

いた象徴的な意味の起源を了解することができると。

私たちの脳の中には、精緻に調整された無数の炎（実際、脳科学者は、神経細胞が活動することを、「発火する」という言葉で表す）が存在する。古来人類が暗闇の中の炎に見ていたものは、自らの意識という不思議な存在の似姿だったのである。暗闇の中で炎を見つめる時、私たちはまるで自分自身の魂を見つめているような気持ちになる。机の上のコンピュータにいくら目を凝らして見ても、それが自分の似姿だという気持ちには、決してならない。コンピュータよりも炎の方が、本質的な意味で私たちの魂に近いのである。

暗闇の中で炎を見つめていた時ほど、人間が自身の魂に近づくと時はない。たき火の炎に直接手を触れて成形することなどできないように、人間の魂にも直接触れることはできない。脳の神経細胞の活動によって生み出される人間の魂には、独自のダイナミクスがあり、カオスがある。たき火の炎から人間の魂まで、複雑で豊かなカオスこそが生命の本質である。炎の手なづけ方を習

得することは、人間の魂との付き合い方を学ぶことにつながるに違いない。

□ 茂木 健一郎（もぎけんいちろう）

ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアサイチャー、脳科学者、理学博士、東京工業大学大学院客員助教授、東京芸術大学非常勤講師。一九六二年東京生まれ。東京大学理学部、法学部卒業後、同大学院理学系研究科物理学専攻修了。理化学研究所、ケンブリッジ大学を経て現職。主な著書は、『心を生み出す脳のシステム』（NHK出版）、『意識とはなにか 私を生み出す脳』（ちくま新書）、『脳内現象』（NHK出版）、『脳と仮想』（新潮社）、『スルメを見てイカがわかるか！』（角川書店、養老孟司氏との共著）など。



カナダの友人の山小屋の暖炉